財団法人国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM
(TJF)

ISSN 0919-7265

国際文化フォーラム通信

1999年
7月発行
no.43

特集

伝えあう場をつくりたい

高校生の生活写真コンテストの開催を通じて

国際文化フォーラム(TJF)では、今年度も「高校生の生活フォトメッセージコンテスト」(「高校生の生活写真コンテスト」を改称)を開催します。海外の高校生に向けて日本の高校生に写真とことばでメッセージを発信してもらおうという試みです。このコンテストは、海外の若い世代の日本理解ひいては日本の同世代との相互理解を深めてもらうことをめざしていますが、一方、日本の高校生にとってこのコンテストは、自分や友だちを再発見し表現する場ともなりました。自己の確立、自己表現、他者理解というプロセスは、国際理解教育の原点といえるでしょう。今回の特集では、これまでのコンテストに参加した教師や高校生の声を紹介しながら、本コンテストが持つ教育的可能性について考えてみたいと思います。

シリーズ

ことばは楽しい5
アラビア語

アジアのことばを学ぶ21
『小溪』(せせらぎ)と『물결』(なみ)の創刊

見る聞く考えるやってみる授業5
こころとからだを動かそう

二つのことばで語る私の文化論11
日本語にみる日本人の「借用」の知恵

TJFニュース

高等学校の中国語
韓国朝鮮語教育の
調査レポート発行

違う角度から物を見つめる姿勢づくり

東京都立国際高等学校* 黄秋涵

* 所属校はコンテスト応募当時のもの。以下同様

昨年の夏休み、近づく受験を前にして、このまま高校生活を終えてしまったら、自分にいったい何が残るのだろうかと勉強が手につかないでいました。そんなある日、この写真コンテストについて書かれた新聞記事が目にとまりました。

高校3年になって、残り少ない高校生活を大事にしたいという気持ちや、受験勉強の抑圧から解放されたくて、よく友達同士で写真を撮りあっていたこともあり、私たちの日常生活を紹介するフォトメッセージを作るというコンテストの趣旨を読んで、これならば私にもできると気軽に考え、コンテストに取り組むことを決めました。高校時代に何か形のある足跡を残したい。そんな気持ちもありました。

私の学校には、目的意識の高い積極的な生徒が多く、いつも彼らと比べて目標がはっきりしない自分にいらだちやあせりを感じていましたが、ある時ふと、そんな目先のことや人々に振り回されることより、自分は自分だ。自分のペースで頑張っていこうと思うことができるようになりました。

私にそんなたくさんの刺激を与えてくれた親友を主人公に選び、はじめはその表情や日常の風景を撮っていましたが、現像したものを見ているうちに、自分がいったい何を伝えたいのか不明瞭なことに気付きました。

はじめは大学受験への不安や自分の抱える悩みを伝えようとしたのですが、もう一度それらを海外の同世代に伝えるメッセージとして考え直した時、いろいろな事情でもっと深い悩みを持っている世界中の人の存在に気付き、その人たちにとってみれば今自分がこのような悩みを持てることが幸せなのだと感じ、置かれている環境に感謝しなければならないという考えに達しました。

必ずしも、私の言いたかったことが写真でうまく表現できたとは言えませんが、このコンテストに応募したことで、自分の中で漠然としていたものを形にできたという貴重な経験を得ました。また、その喜びは私を大きく変化させてくれました。

今は、大学に進学し、新しい環境にもようやく慣れつつあります。あの経験を踏まえて、苦しんだり、悩んだりすることがあっても、自分の夢にむかっていつも前に進んでいきたいと考えています。

■1998年のクレハルエ～午前編～

〈キャプション〉

テニスの写真(右)：アレレ？　ボールは？　クレハルエまた空振りした。もっと、テニスを極めよーの会に入らねば

お弁当の写真(左)：楽しい楽しいお弁当の時間も終わって、リップを塗っているクレハルエ。普段とは違って(？!)おとなしいな

〈主人公プロフィール〉

名前：呉　玲栄(クレ　ハルエ)
性別：女
年齢：18歳
学校：東京都立国際高等学校
学年：3年生
所属クラブ：写真部
趣味・特技：笑うこと
好きな言葉：一期一会
一番大切なもの：友だち
一番楽しいこと：友だちのダジャレを聞くこと
将来の夢：世界一周

黄さんの応募作品から

自分さがしの旅への第一歩

愛知教育大学附属高等学校 中村尚暁

「僕らの生活って何だろう？　それを伝えることって何だろう？」そんな疑問を投げかけてくれた今回のコンテスト。それは現代の偏差値・管理教育に閉じ込められた僕らにとって自分自身を、そして友だちという存在を、見つめ、問いなおすよいきっかけをつくってくれた。

普段なにげなく通う学校、なにげなく会話する友だち。そして恋人。そんな僕らを取り巻く当たり前であってちょっと微妙でシリアスな関係。そんな関係をカメラというもう一つの視線を手に入れたことによって、僕ら自身も考えさせられ、新鮮な気持ちで見つめ直すことができたように思う。

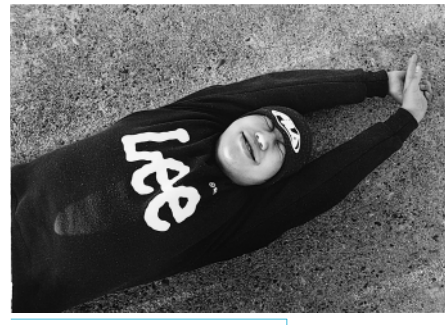
また、被写体となってくれた主人公とコミュニケーションをはかっていくなかで、主人公の人間的な素晴らしさ、そして普段どんなに仲がよくても今まで見ることのできなかった、見せることのなかった素顔を感じることができた。そのことは僕らに、人を好きになることや感動することの大切さ、それにも増して、“今”という瞬間を生きる大切さを改めて教えてくれた。

写真というものは、シャッターを押しさえすれば誰もが目の前の情景をフィルムに写し撮ることができる。しかし、そこには高校生にしか写せない、17歳という若い視線と心にしか写せない世界がある。その世界に今の高校生はもっと自信を持つべきだし、もっともっとその時、その瞬間を大切にしていくべきではないだろうか。

今後、僕は一生かかって写真を撮り続け、人に何かを伝える作業をくり返していくだろう。しかし、それは同時に自分さがしへの終わりなき旅でもある。今、振り返ってみればこのコンテストがそんな旅への第一歩だったかもしれない。

今年もコンテストが開催されるという。ぜひ多くの高校生が写真を撮ることをきっかけに自分自身を、そして自分たちの世界を再発見してくれればと思う。

中村さんの応募作品から



■撮影前に中村さんが作ったメモから

〈イメージ〉

Aくんは、高校に通うために家を離れ都会の○○にでてきている。週末は××市に帰り、大自然とふれあうことを大切にしている。

〈撮影したい場面〉

1. 通学（電車）
2. 自転車に乗る
3. 自転車修理
4. 学校での生活
5. 生まれた町 海の写真

〈テーマ〉

Aくんのあのパワーの源は？
Aくんらしさって何？

中村さんは、作品づくりにあたって、何を伝えたいか、そして主人公を通してどう表現するかを整理するために撮影メモや、絵コンテを作っています。また、たくさんの写真の中から、主人公らしさが表現されているのはどんな場面かを友人と話しあったり、構成を考え直して5枚の組写真を作っていったそうです。

写真から聞こえる子どもの叫び

大阪府立大手前高等学校定時制課程写真部顧問 野村訓

いつの頃からか私は道端の小さな花に目をむけるようになりました。誰の評価も気にせず、“自由”にその小さな天使を写真にすると、頭が限りなく透明になり軽くなります。自分を感じます。

今、子どもは、親による価値観の強制や他者による自己存在否定(いわゆるイジメ)などで自分を見出しにくくなっています。カメラは、親や教師や医者、子ども自身にも分からない深層心理を描き出す不思議なメディアです。今のカメラは、簡単に写真が撮れるので、私は技術論を教えるより、子どもが何を撮るかということを大切にしています。あーしろ、こーしろと言わずに、「好きなように撮ってきなさい!」と言うと、彼らは喜んで撮影に出かけます。いつも撮影時には、一人3本ずつフィルムを渡していますが、最初何を撮ればいいか迷っていた子も、2本目くらいから、無意識に特有の“原風景”を撮影し始めます。そこには、幼い自分が登場する原風景や、現実の心の叫びがあります。父のいない子どもは、父をイメージして撮ります。中年男性特有の頭の退化現象ばかり撮った子どもがいました(写真A)。知らず知らず、カメラを通して父を求めていたと思われます。

また、小学校からイジメにあい、中学ではほとんど不登校であった子がダンゴムシばかり撮ってきました(写真B)。人間を拒否し、昔の映画のように「私はダンゴムシになりたい」と言っているようです。

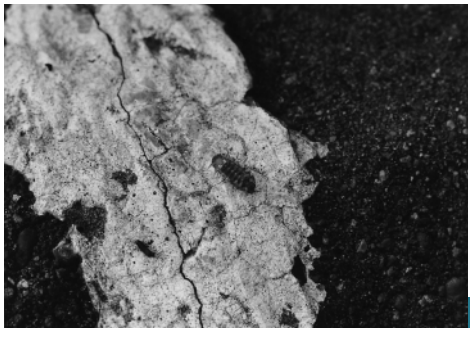
写真Cは、被写体が中央に位置しています。被写体を中央に置くことは一般的ですが、100枚中90枚以上このような写真を撮る子どもがいました。私は何かに抑圧されているのではと体験的に感じました。中央にものをきちんと置くことは、幼いころからの親の躾が厳しかったことの表れだと言えばそれまでですが、私はその躾が子どもの“自由な感性”までも縛り付けてしまったのではないかと思うのです。

人間嫌いな子どもや、抑圧に苦しむ子どもを指導するのは、至難の業です、私の写真指導の第一歩は、以上のように子どもの意識下にある“原風景”を見つけ出すことです。“原風景”は、決して美しいとは限りません。病んでいるものも多いのです。そして、子どもをオリジナルな人格と固有の感性を持った一人の人間として時間をかけて認知していくことが第二歩です。不思議なことに、“自分をほかの何者でもない一人の人間”として認められたと感じると、子どもは顔が変わり、一種のオーラさえ感じられるようになります。

固有の原風景を自分で見つけだし、写真を通して自分自身を知ってもらいたい。これが、私の最終目標です。“原風景”は、抑圧が強いほど、“仮”の原風景が多いということに注意しながら、自由な活動の中で、子どもの“サイン”を見逃さないこと、これが真の原風景をかいま見るコツです。最後に写真Dをご覧ください(撮影:筆者)。ある親子の写真です。母と娘の楽しそうな会話が聞こえてきませんか? 写真には声があります。叫びがあります。お父さん、お母さん、そして先生、耳をすまして、子どもの写真を見てあげてください。叫びを聞いてあげてください。

A

C


B

D

自由な表現で日常を写し出してほしい

正則高等学校(東京都)美術科教諭 土屋純一

私は美術の選択授業で数年前からコンピュータを使っている。その中で、画像加工のための写真を生徒にカメラで撮らせていたのだが、偶然このコンクールを知って参加してみることにした。その理由は、テーマが彼らの視点にあっていることと外の世界に発信していくことが密室の授業よりはるかに有意義に思えたからである。特に海外の高校生にも見てもらえるというのがいい。それに彼らの日常を私自身が見てみたかった。

作品にはモザイクが必要かと思うものもあったが今年はすべて応募させた。私があまり介入すると彼らの生の姿ではなくなってしまう気がしたし、参加する以上それが最良の方法だと思った。それにどの写真も上手い下手はあっても全部素晴らしい写真に思えてくる。だから生徒はこの課題に関しては参加さえすればいいことになっている。しかしこれが本当に彼らの日常なのか？と思うことがある。まず、授業でやることが課題という意識をうみ、彼らの自由な表現をセーブするハードルになっているかもしれない。それが必ずしもマイナスとは思わないが、コンクールに対しても同じイメージを持っているようだ。でも自分の写真が世界の人に紹介されることが彼らに表現意欲を持たせているのはとても良いことだと思う。コンクールを意識しすぎた作品は個人的には嫌いだ。でも彼らに特別な方向性を求めているわけではない。ただあまりにも、お利口さんになってもらいたくない。「何が写っていてもいい？」とか「現像出せなくてもいいですか？」と聞かれると、内心ワクワクするのだが、結局持ってこなかったりする。そして新しく撮り直してきてしまう。課題という障害だろうか。その上、私が先生だということも大きな理由だろう。その先生がさらに良くないことに課題内容と関係ないものを撮るなとか、いろいろとばかなことを言ってしまう。これでは皆、気持ちが萎縮するだけだ。毎日が後悔と懺悔の日々である。予算的なこともあって撮影には使い捨てカメラを使用している。この手のカメラで技術的に高度なことを求めるのは不可能だが、良い面もある。使い方によっては高機能なカメラより新鮮な写真が撮れる場合もあるし、気取りがなく、手軽に使えるところがいい。当然、出来上がった写真にもその性質は反映される。組写真にする時は私の期待に反する写真を生徒が選ぶことも日常茶飯事である。まるで私に対するいやがらせのようで楽しい。「こっちの方がいいんじゃない？」と言うと、すぐ変える生徒もいれば、「いや、これは外せない。これにはこういった意味があるんだ」と説明する生徒もいる。今のところ、教師のご機嫌とりでなく自分の考えで選ぼうとする態度の生徒が多くいるのはとても喜ばしいことだ。教師の誘導尋問にそうそう簡単にはまってはいけない。とはいえ、最終的な作品を見て目が点になってしまうこともしばしばである。いけない、いけない。彼らは天才なのだ。最近の歌と言えば「だんご三兄弟」しか知らない私がこれ以上口を挟んではいけない。そう思うようにしている。

内容はどうあれ撮りたいものを撮ればいい。それで彼らの日常に近づくことができるならいいではないか。毎回、生徒たちの写真を見て顔をゆがませながらも、もうすぐ一皮むけるかなと私は密かに期待に胸膨らましているのだ。

長谷川さんの応募作品から

■第1回コンテスト入賞作品「日本の高校生の私生活」の撮影者、長谷川卓司さんの作文
(卒業文集『自分史』から抜粋)

高校生活の中で印象に残っているのが2年の美術の授業で参加した高校生の日常生活写真コンテストで入賞したことだ。友達の生活を撮影していく中で、普段、つきあっているだけではわからなかった友達の私生活、同時に自分の生活を改めてみなおすことができて良い経験だったが、なにげない高校生の生活とはなんだろうと考えて迷った……

写真でいきいきと自己表現しだした高校生たち

関西文化芸術学院（奈良県）写真学科講師　藤原純子

高校生に写真を教えるようになって、6年目を迎えました。私の勤める学校は芸術を教える高等専修学校で、いじめを受けて不登校になったり、学校の雰囲気になじめなかったり、授業についていけず普通高校への進学をあきらめた生徒が多くいます。そういう背景のせいか個性的な生徒も多くいます。

しかし、授業として、写真を教えているうちに、管理教育の中で何もかもが否定されていくような錯覚に陥り、生徒も私も嫌気がさしていました。そんな中で、外の世界と接点を持つこと、学校以外の場で評価されることによって、彼らがやる気を起こしてくれるのではないかと思い、このコンテストへの出品を呼び掛けました。「今の君たちの姿を見たいと世界中の高校生が思っている。私は何も言わないから、好きなようにやって」私が彼らに言ったことはたったこれだけです。高校生といっても、根は単純ですから、賞品目当てに数人が制作を始めました。しかし、私の予想をはるかに超えて、彼らはいきいきと自己表現を始めました。正直なところ、彼らの作品は技術的に幼稚な部分があって、評価の対象になるとはいいにくいものです。ただ、他の写真コンテストなら手を加えたかもしれませんが、今回はまったく「だめ」と言いませんでした。これが彼らの姿であって、私は絶対に手をだしてはいけないのだと自分自身に言い聞かせました。写真は真実を伝えます。それを大人がいじったらコンテストの趣旨に反し、意味を失ってしまうと思いました。

出来上がった作品を見て、彼らの作ったメッセージを読んでいくと、本当に素直に今の彼らの姿が浮かびあがってきました。他の媒体では絶対に表現できない世界が写真にはあり、だからこそ、私自身もまた写真を撮り続けているのだと思いました。しかし彼らはそんなことを考えもせず、半ば無意識に自己表現をしていました。普段押し付けの教育を受けているからこそ、彼らは、このフォトメッセージの中で素直に彼ら自身の姿を表現したのです。

楽器を演奏したり、絵を描いたりするには才能と訓練がいる。でも写真はずっと身近なメディアで誰にでも取り組めるものです。

大きな声で何か言いたいけれど言えない彼らにとって、写真を撮ること、写ることは自分の存在を認めてもらうことにほかならないのです。自分の通う専修学校は、普通の高校じゃないというコンプレックスを持ち、これまで人と違う意見や考えを述べることをためらっていた彼らがこのフォトメッセージを発信し、誰かに認めてもらえることは大きな意味を持っています。そしてそれを発表する場であるこのコンテストは、世界にむけて発信すると同時に、日本の高校生が今抱えている問題を解決する大きな糸口となるのではないか。そう私は思いました。

物や情報の溢れた世界ですが、彼らには、まだ世界が見えていませんでした。学校と家庭とバイト先が世界のすべてだった彼らが、今回このコンテストに参加し、フォトメッセージをつくったことによって、自分のまわりに広がる大きな世界に気付き、その大きな世界を知ろうという気持ちが生まれたのではないかと思いました。この経験を通じて、彼らがさらに成長していくことを期待しています。

関西文化芸術学院の生徒の応募作品から

自分の存在を模索し表現する場にするために

コンテストの趣旨を問いなおして

なぜこのコンテストをやるのか？

海外の若い人たち、特に学校で日本語を学習する若者たちは、ニュースで報道されるような事件にまつわるセンセーショナルなことだけでなく、日本の若い人たちのごく普通の日常生活や、考え、悩み、夢について知りたいと思っています。そういう彼らの希望に応えるためにも、日本の高校生自身に、普段の生活を見つめなおしてもらい、瑞々しい感性で自己表現し、海外の同世代に発信してもらおう。また自分や友だちを再発見することを通して、日本人や日本文化について、ひいては世界のさまざまな文化や人々との相互理解についても考えてもらおう。そんな趣旨で、TJFは2年前高校生の生活写真コンテストをスタートさせました。

本コンテストは、単に平均的な日本の高校生の人物像や生活の断片を紹介した写真の優劣を競うものではありません。TJFは、高校生がこのコンテストに参加することを通じて、他者である友人の生活や考えをとらえながら、被写体に選んだ友人やまわりの人々とコミュニケーションを図るなかで、自らの考えや伝えたいことをフォトメッセージの形で自由に表現することを願ってきました。

個性の表現、個性の尊重って何？

「人気のある歌手のファッションをみんなが真似たり、ルーズソックスを履いたりしている姿をみるたびに日本の高校生って不思議だなあと感じます。必ずしも全員がそうではないと思いますが、みんなが右へならえと真似しているのはなぜですか？　私の周囲の友だちは、逆にどう自分らしさをみつけて、自己主張できるかいつも考えています。以前学校で同じスカートを履いている人を見つけて泣きそうになった友だちもいました。日本の高校生は、みんな自分の個性をどう表現しようかとか、今の自分に、いちばんふさわしいものは何かなどと考えたりしないのですか？」と、アメリカの高校生が聞いてきました。

コンテストに応募してくれた多くの高校生や教師が指摘していたのも、日本の社会では、人と違うことを過度に恐れ、みんなが何かに縛られているということでした。ある教師は、「縛られているのは高校生をはじめとする若い人だけではなく、実は、教師をはじめとする私たち大人自身も縛られている。やる気を失った生徒たちを目の前にして、どう彼らの可能性を引きだせばいいのか困惑している自分にもどかしさと無力感を感じる」と、話していました。最近個性の尊重が叫ばれていますが、現実には偏差値で人間の価値を判断する一元的な見方が蔓延しているようです。

自分さがしの場としてのコンテスト

さまざまな難しい問題を抱える日本の教育現場でいま一番大事なのは、一人ひとりの高校生が自分に対して自信をもち、周りから尊重されていると感じられるようにすることではないでしょうか。そんな自分さがしができなければ、自己表現も、他者理解もうまくいかないのではないでしょうか。そしてそれこそが、国際理解教育の原点でないだろうかと考えるのです。

送られてきた作品のなかには、一生懸命自分を信じ、前向きに頑張っている高校生の姿がたくさんありました。見るものの心を強く揺さぶる、高校生の自然な姿が浮き彫りになっていました。

TJFは、このコンテストが生徒と教師、友だち、家族、ひいては世界の若者たちとの対話を育むとともに、彼らが何ものにも縛られることなく、自分の存在や居場所を模索し表現する場にしていきたいと考えています。

第2回日本の高校生の生活写真コンテスト写真集

『伝えたい私たちの素顔 The Way We Are 1998』

このたび、「第2回高校生の生活写真コンテスト」の応募作品165点（写真825枚）より選んだフォトメッセージを掲載した作品集『伝えたい私たちの素顔　The Way We Are 1998』を発行しました。

日本語を勉強している海外の高校生を主な読者に想定して、漢字にルビをふりました。また、昨年発行した作品集に対して寄せられたアメリカやオーストラリア、中国からのコメントや写真も掲載しました。

今の若い人は本音の部分で人間と関わる経験が少ない、何を考えているのかわからないと一概に決めつけず、26人の高校生のさまざまな生活から彼らの肉声を読みとってほしいと思います。